

## サッカーワールドカップに見る国際理解の視点

荒木寿友(本学教職研究科教授 教育方法学 国際教育)

4年に一度の祭典、サッカーワールドカップ。この一ヶ月近く試合に夢中になった人も多かったのではないのでしょうか？日本の躍進には心が踊りましたね。

私は日本にはまだプロリーグすら存在しない、オリンピックにもなかなか出場できない時代(釜本邦茂さんなどがメキシコオリンピックで3位になったのは私が生まれる前)、小学校3年生のときに地元の少年団でサッカーをはじめました。1980年くらいのことです。日本が世界の舞台でサッカーで勝負ができるとは到底思えない時代でした。

当時の私は、ワールドカップはあるのは知っているけど(『キャプテン翼』のおかげで!)、日本にはその権利すら与えられていないと思っていました(大きな誤解ですが)。それが今や、オリンピックやワールドカップの本大会に出場するのが「当たり前」になっていることに大きな喜びを感じるとともに、40年前からやっていたことが少しはサッカー人口の底上げに役に立ったのかなと思っています。ちなみにその後私は、中学校・高校・大学、そして大学の教員になってからも細々とサッカー(とかフットサル)を続け、40歳のときにビーチサッカーという猛烈にしんどくて楽しいサッカーを最後に、競技としては現役を終えました。

さて、サッカーに限った話ではないですが、スポーツはすべてその競技をする人の中で共通のルールを守るという前提のもと、競技が成り立っています。サッカーのルールの中で、突然誰かがアメフトのルールでタックルを始めたら試合が成り立ちませんよね。もちろんそんな行為はレフェリーによって反則が取られますし、場合によっては退場処分になるかもしれません。

では、その視点から現実の世界情勢を見るとどうでしょうか？

ロシアによるウクライナ侵攻、ロシアにはなんらかの言い分はあるでしょうが、「国家の独立と主権を認めるというルール」をないがしろにしたものと言えるかも

しれません。つまり、世界中の国家で共有すべきルールが実は共有されていないという実態、更にはレフェリーに該当する国際的な組織が、「実質はない」ということが顕在化したといえます。もしそのような組織がちゃんと機能しているのであれば、とくに一方的な侵攻は終焉を迎えているはずですよ。

ワールドカップ本戦の予選リーグでアメリカとイランが試合しました。この両国は政治的には緊張関係にある国です。ではサッカーの試合も荒れたのでしょうか？答えは否です。選手や監督が政治利用されることを拒否したという理由もあるでしょうが、両国が共有しているサッカーのルールの中で戦ったから荒れなかったと言えるでしょう。試合後には両国の選手が抱き合って健闘を称える姿が報道されました。

別の視点から見てみましょう。ワールドカップ準決勝ではフランスとモロッコが試合をしました。モロッコの公用語にはフランス語があげられていることからわかるように、かつての宗主国フランスと植民地支配されていたモロッコが試合をしました。試合はフランスが勝利しましたが、フランス国内では少なからずの暴動が起きました。両国の歴史的な関係を知っていれば、単なるサッカーの勝ち負けを超えた原因がそこにあることがわかります。つまり、かつての「支配—被支配」という関係性が意識的にも無意識的にも今も根強く残っていること、移民に対する抑圧とそれへの反発などがあったことが推測されます。

国際的に物事を捉えるというのは、ある教科の視点からだけ捉えるということではありません。日常生活の中に国際的な視点(共通のルールの中で生きていくことやフランスとモロッコの関係)は隠されています。国際的なスポーツの祭典を見る際には、歴史的な背景を知るといっても大切です。スポーツを通じて、世の中のことが少し垣間見られますので、ぜひその視点も持ち合わせてみてはどうでしょう。